
それは人を愛している

たまねぎ提督

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは人を愛している

【Nコード】

N1126S

【作者名】

たまねぎ提督

【あらすじ】

村人は12歳になったら村を出て、嫁を探すために外に出される

そんな事を言われ村を追い出されたリドル

正直まだ嫁には興味は無かったのだが、村に戻るためには嫁を探さなければいけない

村から出た事がないリドルは、村を訪れていたケフィスに案内され旅路に行く

リドルは何を見るのだろうか

1話（前書き）

ある程度プロットは考えていますが更新時期は不明
設定考えるのは非常に楽しいんですが・・・

1話

背の高い木の上から少年は森を眺めていた。

頬を撫でる風が気持ちいい。今日が晴れでよかった——そんな事を考えていた。

少年は自分が育った村の方角を見るが、木に隠されているのか村を見る事はかなわなかった。

少年の名はトリル。村の掟により村を追い出されて今ここにいる。追い出された、と言っても別にトリルが悪い事をしたわけではないのだが。

村人は12歳になったら村を出て、嫁を探すために外に出される

掟と言われては逆らえず、しぶしぶ承諾したトリル。一部の連中も反対したのだが村の掟には逆らえなかった。

長老からそのそうな事を伝えられ、村を追い出されたのだ。

伝えられたのは去年の事で、この一年間は外で生きるための手段を徹底的に教え込まれた。

武器の使い方から狩りに必要な知識、技術。魔術に関しては村に使い手が居なかったために学ぶ事は出来なかったが、行商人から買った本で理論だけは多少なりとも覚えた。使用出来るまでには至っていないかったが。

「さて、そろそろかな。」

トリルはそうつぶやくと再び村の方角へと視線を向ける。そろそろ村から行商人が出てくるはずだ。

村の外に関する知識が乏しいため、行商人に着いていけばとりあえずは近隣の村に到着する事は出来るだろう、とトリルは考えたのだ。

旅立ちの日を決めたのはトリルではないが、行商人の来訪は偶然ではないだろう。

トリルは村人を愛していたし、愛されてもいた。そんなトリルのために行商人の来訪の日付を旅立ちの日付を合わせたのは村人の優しさだというのは想像に難くない。

これからどうするか——そんな事を考えながら、トリルは行商人が出てくるのを待った。

「ケフィス！」

トリルは行商人——ケフィスの姿を確認すると、木から飛び降り駆け寄った。

「トリルじゃないか、待ってたのか？」

ケフィスはトリルの頭を撫で、話しかける。

「長老から話は聞いてる。ついでだし近くの村まで送っていったよ。まあ近くとは言っても数日はかかるけどな」

ここの森は深い。何度も行き来しているケフィスとはかく、トリルが抜けようと思ったなら数倍は時間がかかるだろう。

「ありがとうケフィス。俺、森から出た事ないからちょっと不安だったんだ」

「——ああ、そうだろうな。時間はあるから話しながら行こうか。外での常識とか教えてやるよ。知らずに恥かきたくはないだろう？」

二人は会話しながら森の中を進む。近くの村までは数日ある。

——いや、数日しかない、か

そんな事をケフィスは考える。トリルには一般常識が欠けている。どの程度かまでは把握は出来ないが、ずっとあの村にいたので仕方が無い事ではあるう。

最低限でも教えておかないとこの先トラブルになるのは間違いない。

村の連中はトリルの事を愛している。間違いなく甘やかされて育てられたのだろう。

村から離れて数刻しかたってないが、この森で他の生物を見えない事からも想像できる。

何度も行き来しているケフィスでさえこんな落ち着いた森を見るのは初めてだった。

彼らがトリルの安全を願って加護をかけたか、道中の危険な生物を排除したかのどちらかではないだろうか。

事実はその両方であるのだが。

「トリル、外で決してやってはいけない事がある。まあいくつかあるんだがこれだけは覚えておいて欲しい。」

なんだろう、とトリルはケフィスを見返す。

「この森の村から来た事を言っではいけない。特殊なんだよ、この森は」

「特殊？」

「ああ、特殊だ。この森にあるあの村も特殊でな、彼らはこの森に人の手が伸びる事を望んでいないんだよ。事情はいろいろあるが……」

自分の育った村、そして森を特殊と言われてもトリルにはいまいち理解が出来ない。

それをケフィスは分かっているが、どこまで説明していいのかわからない。全てを説明しきってしまうのは彼らの望む事ではないだろう。それを望んでいたならばトリルはこの村の事情を理解しているはずである。

ケフィスとしてはこの森が特殊という事さえ教えたくは無かったが、この忠告をせずにトリルがどこかで彼らの事を言っしまえば誰にとっても不幸な事になる。それだけは避けねばならない。

いずれトリルも知るだろう。この森が死の森、災厄の森と呼ばれ忌み嫌われているという事を。

「あー……とりあえず、お前の村に迷惑がかかるのは嫌だろう？」

「そりゃ嫌に決まってる」

「この森は彼らにとって大事な場所でな。他の人間が入るのを好ましく思っていないんだ。なに、お前がそれを言わなきゃ誰にも迷惑はかからないんだ。簡単だろう？」

「分かったよ。」

納得はしていないが理解はした。村に迷惑がかかると言われては
頷くしかない。

何故詳しく教えてくれないのかも思ったが、ケフィスが困った
顔をしてたのでそれ以上は聞かなかった。

教えてくれないのはまだ自分が若いからか——いつか教えてくれ
るだろう、と思い他の話題を考える。

正直、村から出たいとは思っていなかったから外の事に興味があ
ったわけではない。知っている事もそう多くは無い。だから知らな
ければならない事は多い。

出来ればケフィスに着いて行きたい、というのがトリルの本音だ。
行商人ならいろんな村を回るのだろう。トリルの目的の嫁探し——
正直これもあまり興味はないんだが——にも彼に着いて行くメリッ
トがある。

そこまで考え、ケフィスに話しかける。

「ちょっと相談があるんだけど」

「どうした？」

「ケフィスはいろいろな村を回ってるんだろ？ 俺も着いて行つた
ら駄目かな？」

「あー……」

「ケフィスも知ってると思うけど、俺の目的は嫁探しなんだ。いろ
んな村を渡り歩く事になると思う。それは行商人のケフィスに着い
て行っても一緒だろ？」

「いや……そうなんだろうけどなあ」

「荷物持ちでもいいからさ、連れて行ってくれないかな？」

「それなんだがなあ、トリル。実はお前に言っただけだ」
ケフィスは言いにくそうにため息をついた。

「実はな、俺は行商人ではないんだ」

2話（前書き）

誤字脱字報告は喜びます。

4 / 0 2 誤字修正 メインキャラクターの名前間違えるとか泣き
たい

4 / 0 8 学園↓学院に修正

2話

「実はな、俺は行商人ではないんだ」

そう言ったケフィス。

村で入手できない物を持ってきたり、逆に村から何か買っている彼。

今リドルが持っている護身用の剣も、リドルが勉強してきた本も彼から買ったものだ。

そんなケフィスが自分が行商人ではないという。

――嘘についてまで自分を連れて行きたくないのだろうか？

そんな疑問を持ったリドルにケフィスは続ける。

「たしかに、あの村では行商人みたいな事をやってはいるがな、本職ではないんだよ。俺の本職は冒険者なんだ」

「冒険者？」

「ああ。あの村での取引も、ギルドで依頼があった品の売買なんだよ」

ケフィスはリドルに冒険者、冒険者ギルドについて簡単に説明する。

ある程度の規模以上の町には冒険者ギルドという物が存在する事。そこで仕事（依頼）を請け負い、それをこなす人達は冒険者と呼ばれるという事。

ケフィスはその冒険者ギルドに所属しそれで生計をたてているという事。

そして――ケフィスはそのギルドで危険な仕事も多く受けているためリドルを連れて歩く事は出来ないという事――

「というわけですまないがリドル。お前を連れて歩く事は出来ないが……」

ケフィスは落ち込んだリドルの頭に手を置き続ける。

「別にお前をどこかそのへんの村に置いて行く、という事ではない

よ。そこまで俺は薄情者じゃない。それにそんな事をしたら次にあの村に行った時に俺がどんな目に会うか想像するだけで恐ろしい。あの連中を見てるとお前が愛されているのがよくわかるからな。」

「でも連れてつてはくれないんだよね？」

「ああ、常に連れて行く事は出来ない。そこでだ、俺に提案があるんだが……リドル。お前、学院って興味はないか？」

「学院って貴族とかそういう人達の事じゃないの？」

「そういうのもあるな。だが俺が言ってる学院は違うぞ。平民が多いし、学べる事も多い。お前はまだ若いし、嫁探しにしてもまだ急ぐ歳でもない。俺みたいに歳くつてると学ぶ事すら難しいからな」

——そういえば聞いてないけどケフィスって何歳くらいなんだろうか？俺が子供の頃から村に来てるし、見る限り30〜35歳のようない機もする。

「……お前、今俺の歳を想像しなかったか？」

図星を指され誤魔化すように笑う。

「まあ、30代だ。話を戻すぞ。学院というのは学ぶ機関。そうだな。剣術や座学、それに魔術も場合によっては学べる。滞在期間はまあ3年くらいでどうだ？ その頃には15歳。嫁探しはそれからでも十分だし、もしかしたら学院でいい子がいるかもしれないしな」
たしかに提案としては悪くない。それどころかいいと言っても良い。いろんな町を渡り歩くのもいいが、学園というのは多くの人が集まる場所と聞いた事がある。嫁探しにしてもケフィスの言うとお
りだ。

「すぐ決めるって言うんじゃないぞ？ 次の村には明日着くが、学院がある町まではまだ日付がある。それに俺の目的地もその町だしな」

「わかった。俺、学院に行くよ」

「なあリドル。すぐにじゃないって……」

「いや、決めたんだケフィス。俺は村から出た事がない。そりゃ本や長老からいろいろ学んだけど、足りないと思う。仮にこのまま嫁

を見つけて村に帰っても、俺が村で出来る事は限られてる。」

これはリドルを過小評価してたかな、とケフィスは思う。

リドルはまだ12歳だ。それにあの村は隔離されてるため、もつと世間知らずだと思っていた。

たしかに世間知らずではあるが、これならあまり心配しなくてもいいかもしれない。

そんな事を考えていたのだが、自分でも気づかないうちにケフィスは微笑んでいたんだろう。

「ケフィス！　今馬鹿にしたらどう！」

「いや、馬鹿になんてしてないよ。思ったいたよりよく考えているな、と」

「そりゃ俺の将来の事だから考えるさ！　まあ……嫁探しだけは考えたくはないんだけど」

たしかに王族でもあるまいし12歳で考える事ではないとも思う。

「とにかく！　俺は学院に入りたいと思う。ただ学院つてのはやつぱお金かかるんだろ？」

「そりゃかかるな。もちろんその事もふまえて学園の話をしたんだよ。学院に入っても金は稼ぐ事が出来るんだ。町で働いたり、学院内でも働けるな」

「学院内で？」

「ああ。危険の少ない場所への鉱石採取、薬草採取。それに実験の助手とかもあるな。とにかく、お前はそこで学院費用、滞在費用、旅費を3年かかって貯めるんだ。悪くない話だろう？」

悪くない話だ。学院を出た後の事も考えられてる。

ここまでくると正直それ以上の案はないように思えてきた。

「それにな、俺も学院がある町を拠点に冒険者やってるんだ。何かあった時に頼れる大人がいたほうがいいだろう？」

「うん、やつぱ俺は学院に行く。頼れるかどうかは分からないけど知り合いの大人は貴重だからね」

意地の悪い笑みを浮かべそう言ったリドル。

そんなリドルを頭を乱暴に撫で、ケフィスは笑う。

「さて、今日はここで野営だな。このままだと明日には近くの村に着くからな。ああ、言い忘れてたが次の村はナジールって村だ」
——そうか、村って名前があるのか。たしかに全部”村”では分らないよな。

村の外での交流がなかったからいまさらそんな事に驚く。

「そして学院がある町はデイスティルと言う。それとな、面倒を避けるためにお前は俺の弟って事にしておく」

「ケフィスの弟？」

「ああそうだ。お前の村の事は秘密だと言っただろう？ そうするとお前の出自の事で何か聞かれるかもしれないからな」

リドルは理解した。たしかに、ケフィスとリドルはどちらも金髪であり似ている。

ケフィスのほうが多少黒みが入っているが兄弟と言われて違和感はないだろう。そう、髪の色は。

「わかった。けどケフィス」

「なんだ？」

「兄弟にしては歳が離れすぎてると思うんだけど」

「……認めたくはないがたしかにそうだな」

「さすがに認めようよ、父さん」

ケファスは苦い顔をする。たしかにこれくらいの歳の子がいてもおかしくはない年齢だ。おかしくはないんだがそれでも父さん、と呼ばれる事に抵抗がある。

「リドル……実は俺20代前半……だったらいいなあ」

「さすがにそれは無理があると思うな。まあ、歳が離れた兄弟ってのもいるから。よろしく兄さん」

からかう事に成功した、と楽しそうにリドルは笑う。ケフィスは苦い顔のままだが。

「……よろしく、弟よ。」

おぼえておけよ、とつぶやき野営の準備を始めるのだった。

3 話（前書き）

話の区切りが難しい。

誤字脱字報告はかなり喜ばれます。

3話

ケフィスの言ったとおり、村には翌日の夕方に到着した。今日はこの村で夕食をとる予定だ。

訪れた村はリドルの暮らしていた村と大きな違いはなかった。

リドルは違和感を感じたが、自分の暮らしていた村と比べて違和感を感じるのは当たり前前の事だろうと納得した。

ケフィスは村長にあいさつし、仕事をしてくると言ってリドルを置いて行ってしまった。

どうもこの村も外とはあまり交流がなく、ケフィスのような旅人は珍しいらしい。仕事というのもまた行商人みたいな事なんだろう、と考えていた。

リドルはとりあえず観光する場所もないだろうと判断し、ケフィスに教えてもらった宿で待っている。

宿と言っても食堂が本業で、滅多に来ない旅人のために二階を客室として利用しているような場所であったが。

「あら、初めて見るお客さんね。あなたがケフィスさんの弟さんかな？」

一階の食堂部分で待っていたリドルに、見知らぬ女が声をかけてきた。

歳は10代半ばといったところだろうか。人当たりの良さそうな笑顔をしている。

ケフィスの名前を出してきた、という事は知り合いなんだろうか。とりあえずケフィスの弟——という事になってるので肯定しておく。もっとも、相手も知ってて声を掛けているんだろうが。

「いきなりごめんね。私はイルナ。ここの一人娘なの。よろしくね」

「うん、よろしく。俺はリドル。兄さんと一緒に旅をしているんだ」

「さっきお父さんから聞いたわ。一泊してディステイルに戻るって事も。暇してるように見えただけお話聞かせて欲しいな？」

「お話………？」

「ええ、そうね。デイスティルの話とか旅の話とか。旅の人って珍しいから」

——これは拙い。数日前に村を出たばかりなのにデイスティルの事なんて知っているわけもない。知っているのは学院と冒険者ギルドがある事くらいだ。

何を話すべきか迷っていると、食堂の奥からタイミング良く声がかかる。

「イルナー！ 話なら後にして手伝ってくれ！」

「わかったー。ごめんねリドル君。また後で聞かせてね？」

「う、うん」

イルナは呼ばれて食堂の奥に消えていく。

——助かった。

そう思わずにはいられない、が多分夕食後にまた話をしにくるんだろう。それまでにケフィスが戻って来てくれればいいんだが。とりあえず、間に合わなかった時のために本で読んだ事で無難な話を作れないか頭を悩ませる。

最悪、夕飯後に準備があるからと言って部屋に戻ればなんとかなるかな、とも考えるリドルであった。

「そりゃ災難だったな」

話を聞いてケフィスは笑った。

夕飯前に戻ってきて、今はリドルと一緒に食事をしている。

「笑い事じゃないよ。村の事を黙っておけと言ったのケフィスじゃないか」

「まあな。ま、そのへんは俺が話をしておくから心配するな。イルナも悪気があったわけじゃないしな。それに”兄さん”だろ？」

「分かってるよ兄さん。そういえば仕事って何かあったの？」

「あそこでの仕事とそんなに変わらないよ。外から仕入れてきた物を売ったりな。あとは……手紙とかだな」

「手紙？」

「ああ。場所が場所だからな。手紙の配達つても冒険者への依頼のうちなんだ。まあ依頼料が安いから何かのついでに受けるのが一般的だが」

なるほど、たしかに合理的ではある。

「けど受ける人がいなかったらどうなるのそれ？」

「一定期間だれも受けなければギルドの人間が配達する事になるな」

納得したリドルは食事を再開した。とは言っても、量が多く食べられるか不安ではあるが。

その事をケフィスに伝えたと無理しても食べる、と言われたので頑張つて食べる事にする。村のだれよりも食べれたのに、外では通用しないみたいだった。

ケフィスの知識は豊富だ。聞いておいて間違いはないだろう。

「ケフィスさん、リドル君。どうかな？」

食事している彼らの元にイルナが話しかけてきた。ケフィスは手をとめてそれに返す。

「ああ、美味しいよ。イルナも手伝ったんだろ？」

「うん！ その煮込みとか自信作なの」

「これイルナが作ったのか。どおりで美味しいと思った」

「お世辞言つても駄目だよ？ ね、リドル君どうかな」

「兄さんの言うとおり美味しいよ」

そうリドルが答えると、嬉しそうにイルナは笑う。それをみたケフィスは苦笑した。

「やっぱ歳の近い男の答えのが嬉しいのかな？」

「そんなんじゃないってば！ それよりさっきの話なんだけど」

慌てて話題を変えるイルナ。これは嫁探しすぐに終わるんじゃないか、とケフィスと思う。

「デイスティルの話ならリドルより俺のが詳しいぞ？ やっぱリドルの事が……」

「だから違うつてば！ ほら。学院の事とか聞けたらいいなあって」ケフィスは納得した。イルナが聞きたいのは多分学園内部の事だろう。

たしかイルナの妹が今期から学院に入っているはずだ。リドルが学園に入ってるかもしれない、と考え聞いてみたのだろう。

「残念ながらまだリドルは学院に入っていないんだ。ただ、今年から入るから妹さんにも会う可能性はあるな」

「そつか。あ、ケフィスさん。手紙って……」

「ああ、イルナ充ての手紙ならあったよ。村長に預けてあるから取りに行くといい」

「ありがとう！」

そう言い残してイルナは食堂から出て行く。よほど待ち遠しかったのだろう。

「イルナに妹いたんだ」

「ああ。なにやら才能があるとかで学園に入る事になったらしい。詳しい話は知らんが名前はレニだったかな。向こうで会ったらよろしく言っておくのもいいかもしれないな」

「会ったらそうするよ」

とりあえず、二人は残った夕飯を片付けるため手を動かした。

4話（前書き）

ちよつと日付が空きました。
主人公最強物語、ではないはず。

4話

振り下ろされる一撃をケフィスは半歩下がって避ける。

避けられたリドルはさらに踏み込み、木剣を繰り出す——が、ま
たも避けられる。

剣筋は良い、とか決して言えないが、速い。これで技術さえ身に
付けば危ないな、とケフィスと思う。

リドルの剣は相手を打ち負かすための剣というよりは生き残るた
めの剣だ。まあ、あの森の魔獣を考えると当然とも言えるだろうが。
冒険者であるケフィスにとっては正しいが、技術というより本能
で振っている剣。怖くは無い。

フェイントもない実直な剣を横に避け、ケフィスは一步踏み込む。
剣の間合いから拳の間合いにされたリドルは思わず一步下がる。

ケフィスは体勢を崩したリドルに迫り、その胸に手を当てた。

そのまま左足で地面を蹴り、その衝撃をそのままリドルの胸に叩
き込む。

リドルは吹き飛ばされる、がダメージはそうないはずだ。

もつとも打撃を加えるより、であってダメージがないわけではな
いのだが。

「リドル、何度も言っているだろう？ 攻撃が大振りすぎるんだ」

「そんな事言っても・・・」

リドルはデイスティルに向かう途中にケフィスから剣術を習って
いた。

村でも大人達から習ってはいたが、剣を使用しているといっても
剣術というより体術と言ったほうが近いだろう。

型とかは教えてもらえず、ほぼ実戦形式での訓練だった。

村ではそれなりに戦えるほうではあったが、未だケフィスに一撃
を入れる事は出来ない。

何故か村での訓練と違ってケフィスの動きが分かり難いのだ。

リドルが村で実践をやった時や村の狩りに参加したは、大なり小なり相手の動きが読めた。それに合わせて戦っていたのだから今ケフィスとやっている訓練は非常にやりにくいものであった。

「ケフィス・・・兄さんの動きがおかしいんだよ」

「いやおかしいってお前・・・」。とりあえずもつと動きを小さくして当てる事を目指したほうがいいぞ。お前は力はあるからな。当てれば大振りじゃなくても倒せる可能性はある。まあ、今日の実践訓練はここまでだ。教えた型で素振りしておけよ？」

「了解」

ケフィスはそのまま野営の準備をする。

リドルの育った村を出てから約一週間といったところだろうか。

目的地のディステイルまでは後数日。

その間の移動中は勉強、そして野営時は剣術の訓練。あと数日しかない。

リドルは物覚えがいいが、それでも数日では教えられる事は少ないだろう。

それでも教えなければいけない事はある。この一週間の旅路で嫌でも気付いてしまったリドルの異常さを。

リドルは強い。

技術が、ではなく身体能力がである。

それはあの村で特殊な訓練を積んだのか、それともあの森の魔獣に鍛えられたのか分らないが。

しかしそれは筋力的な問題ではないように見える。

見た目には線の細い12歳の少年なのだ。

おそらく魔力的、魔術的要素なのだろうがその方面に疎いケフィスには正確な理由は分らない。

過保護な村の連中がかけた加護というのが一番有力かな、とは思ったが。

とにかく、ディステイルに着いて何か問題を起こしてからじゃない。

そんな事を考えケフィスは野営の準備をしていた。

夕食が終わった後、ケフィスはリドルを連れて野营地近くにあった木の麓まで来る。

「さて、リドル。寝る前の訓練をする前に一つだけ教えておかなければならない事がある。まずはこの木を全力で殴れるか？」

「全力で？ いいけど」

そう言つてリドルは木から離れる。やはり普通ではない。普通は素手で木を全力で殴る、という行為はしないだろう。

少し離れたリドルはそのまま全力で木に向かって駆け出すし拳を振りかぶり――轟音が森に響いた。

「まあ、想像通りというか。手、痛くないか？」

「そりや痛いけど」

多少赤くなった手を振り答えるリドル。

さすがに木は折れていないが、リドルの拳の形はしっかり残っている。

「リドル、とりあえず教えておこう。仮に俺が同じ力でこの木を叩いたら腕は折れるだろうな」

「え？」

「もつとも、そんな力はないが。お前の力は異常だ。全力を出すのはやめておいたほうがいい」

「でも………」

「でも、じゃない。原因は俺にも分からんが、おそらく魔術的な何かだとは思うんだが。学園行つて魔術を学べばそれも分かると思う。頼むからそれまで全力を出さないでくれ」

「………わかった」

異分子は尊敬されるか叩かれるかどちらかである。

後ろ盾のない新人生が異常ともいえる力を持っていたらまず叩か

れるだろう。

——隠し通せるとも思わないが

ケフィスはそう思うと、ばれた時のためのフォローを考える。

常にリドルの側に入れるわけではないのだ。リドルを信じるしかない。

今は出来ることをやるしかないのだから。

5 話（前書き）

学院説明回

次話から学院編になります

5話

大陸南東の王国ルクス。

デイスティルはその領内にある。町の規模は大きく、学院と冒険者ギルドを有している。

デイスティルの学院は王都にある学院と違い、平民でも入れるために学院の規模は王都のそれより大きいかもしれない。

もつとも、教える内容も大幅に違うためどちらが優れている、という判断は出来ないのだが。

ルクス、デイスティルの話は道中にケフィスから聞いていた。

学院に入るのだから、簡単な話だけでも知っておけ、と。

リドルは村ではいろんな本を読んでいたため地理や国の事はある程度理解はしていた。

理解はしていたのだが。

「おい、リドル。キヨロキヨロするなよ。田舎物みたいだぞ?」

「田舎物って……。実際そうだから仕方が無いじゃないか」

初めてデイスティルに来たリドルはその大きさに驚いた。

ナジールの村に行った時は自分の育った村とそこまで差異は無かった。

だが、ここは違う。人が多いので非常に賑やかだ。建物も大きいし多い。

学院がこの町にあるため、リドルもこの町に住む事になるのだらう。

そう思うと、不安と期待がリドルに押し寄せる。

「ま、とにかく今日は宿で休んで明日の朝学院に行こうか。入学には学長の許可が必要だからな」

「えっ。許可?」

「ああ。まあ運良く入学の時期だし、そう難しい事じゃないから安心していい」

大丈夫だろうか、とリドルは不安に思う。

まあ、学院に入るのは手段であって目的ではない。

入れない事があってもそう悔やむことではないだろう。

その目的自体に乗り気じゃないので、学院に入れるのは楽しみではあったが。

「宿は俺が普段利用しているところがある。夜にでも学院の事は詳しく教えるから気にするな」

そう言って先を歩き出したケフィス。リドルは慌てて付いていく。周囲は活気がある。なんだろう、村の活気とは違う。

規模だけじゃなく……笑い声？喧騒？

そこでリドルは気付く。

——そうか、子供が多いんだ。

宿もかなり活気がある場所だった。

ここも酒場、食堂と兼用しており、1階は客でいっぱいだ。

ケフィスは宿の主人とあいさつを交わし、二人分の部屋をとる。

リドルはケフィスの弟、として紹介された。

その際、随分と冷やかしを受けたが——ケフィスに子供が！という声はあえて聞かなかった事にしておいた。ケフィスのために。

二人はそこで食事を取り、部屋に戻る事にした。

宿の一室で約束どおりリドルはケフィスから学院の事を教わる。

リドルが入るのは学院の初等部。授業は選択式だが、初めの半年で習いながらそれを決めるらしい。

学院の性質上編入は多いらしいが、運良く入学時期だったため編入扱いにはならないとの事。

授業で教師がある程度の理解をした、と判断したらその授業は合格を貰え、それが一定数に達したら中等部に進めるとの事。

故に同じ初等部、中等部であっても年齢はまちまちである。

7、8歳で学院に入学する者もいれば、20超えても入学する者もいる。

学院側の配慮で、ある程度年齢別にして教室を割り当てるので目立った差がある教室はあまりないようだが。

学院で教えるのは魔術、武術、薬学等らしい。

他にもいろいろあったが単純にこの程度、と教えられた。

「そうだな、あとは王都の学院と比べるまでもない程度だが礼儀の勉強も大事だな」

最低限の礼儀は必要だろうが、勉強する程必要なのだろうか。

不思議そうな顔をしているリドルに、ケフィスはニヤリ、と口元を歪ませ言う。

「マナーは大事だろう？ 上流階級の人を嫁にする時大変だぞ？」

たしかに、リドルの目的を考えれば大事な事である。

が、ケフィスの下心ありそうな笑顔がリドルには気に入らない。

そう思いつつもリドルはケフィスに笑いかけた。似たような笑顔で。

「たしかに大事だね。ありがとう兄さん。兄さんみたいな一人身にならないようにがんばるから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1126s/>

それは人を愛している

2011年4月9日00時10分発行